



Title	明治時代中期の児童雑誌・少年雑誌におけるジャンヌ・ダルクの伝記
Author(s)	渡辺, 貴規子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 43-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85040
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

明治時代中期の児童雑誌・少年雑誌におけるジャンヌ・ダルクの伝記

渡辺貴規子

1 はじめに

ジャンヌ・ダルクは、現代の日本で最も有名なヨーロッパの偉人の一人である。国立国会図書館国際子ども図書館のOPACによると、第二次世界大戦以降、現在までに、マンガも含めると、52種のジャンヌ・ダルクの児童向けの伝記が出版され、そのうち、21世紀に出版されたのは12種にのぼる¹。ジャンヌ・ダルクの児童向けの伝記は、現在の日本で定番化している。また実際に、若者の間での認知度も高い。たとえば、2011年にクリスティーヌ・ロバント＝サトウが18歳から21歳の日本の大学生213名を対象に行ったアンケートによると、92%の学生がジャンヌ・ダルクを知っており、72%が百年戦争の英雄であることを理解していた。彼らはジャンヌ・ダルクの生涯を歴史教科書のほかに、テレビ、映画、そしてマンガや本からも学んでいた²。

ジャンヌ・ダルクが児童向け伝記の被伝者として定番化したもとをたどると、明治時代に遡る。1869（明治2）年、『西洋英傑伝』所収「二編上 仏郎国女傑如安之伝」として初めてその伝記は日本で出版され、近代児童文学が日本で誕生する1890年代以降も³、児童の模範として、頻繁に児童向けの読み物の中でその伝記が公刊された。

本稿では、ジャンヌ・ダルクの伝記が児童向けの読み物として定番化する基礎を作った読みものとして1890年代に発行された五つの児童雑誌・少年雑誌に掲載されたジャンヌ・ダルク伝について検討する。すなわち、『頴才新誌』掲載の「女傑ジョアンダク伝」（1890年）、『少年文武』掲載の「女傑若安達亜克の偉勲」（1891年）、『少年園』掲載の「ジョアンダクノ伝」（1892年）、『少国民』掲載の「如安達克」（1897年）、そして『少年世界』掲載の「ジャンヌ、ダルク」（1898年）の五つである。

掲載された五誌は、明治時代中期を代表する児童雑誌・少年雑誌であった。たとえば『頴才新誌』は明治時代初期から相次いで出版された青少年向けの投稿雑誌の代表格である。『少年園』は日本初の児童向けの総合雑誌として画期的なものであり、それを模した『少年文武』『少国民⁴』とともに多くの読者を獲得した。『少年園』編集主任の高橋太華、『少国民』編集長の石井研堂、『少年文武』編集長の中川霞城の三者を、少年雑誌の記者の「当代三指に屈すべき人」とする見方があるほどである⁵。最後の『少年世界』は博文館が1895年に主筆に巖谷小波を迎えて創刊した児童雑誌で、文学的読み物の充実と安価な販売価格により他の競合誌を圧倒した⁶。このような明治時代中期の主要な児童向けの雑誌にジャンヌ・ダルク伝は掲載され、多くの児童読者に読まれたのである。

※明治時代の資料からの引用の際には、適宜旧字を新字に改め、ルビを省略・付加した。また、合略仮名については分解して表記した。

¹ 国立国会図書館国際子ども図書館 OPACにて「ジャンヌ・ダルク」で検索。
<https://www.kodomo.go.jp/>（2021年4月18日最終アクセス）

² Christine Robein-Sato, "JANNU DARUKU", Jeanne d'Arc sous le regard des Japonais', *De Domrémy à Tokyo: Jeanne d'Arc et la Lorraine*, Nancy: Édition Universitaire de Lorraine, 2013, p.377-391.

³ 日本における近代児童文学の始点については1891年1月の博文館の『少年文学』の刊行開始とする見方がある他、諸説ある。(Cf.鳥越信『日本児童文学史』、ミネルヴァ書房、2001年)

⁴ 『少国民』は1889年7月に学齢館から『小国民』の雑誌名で創刊されたが、1895年に遼東半島の還付を批判する記事が治安妨害罪に問われ、同年11月に『少国民』に雑誌名が変更された。(続橋達雄『児童文学の誕生—明治の幼少年雑誌を中心に』、1972年、196-200頁。日本児童文学学会編『児童文学事典』、東京書籍、1988年、376頁。)

⁵ 木村小舟『増補改訂少年文学史 明治編』、童話春秋社、1941年。

⁶ 博文館はそれまでに発行した二十数誌を『太陽』、『文芸俱楽部』、『少年世界』に統合する形でこの雑誌を創刊し経営の合理化を図った。このことは、児童雑誌・児童図書出版が大量生産の営利の対象となるほどに、その市場が拡大していたことを意味する。営利も大きな目的とする『少年世界』の創刊を続橋達雄は児童文学の「創始期」と「展開期」の重要な接点と位置づける。(菅忠道『日本の児童文学』、大瀬書店、1966年、42頁。続橋達雄、前掲書、192頁。)

明治時代におけるジャンヌ・ダルクの文献に関する先行研究には、高山一彦の研究と渡邊洋子の研究がある⁷。両者ともに、『西洋英傑伝』以降に出版された単行本、新聞連載、雑誌掲載等におけるジャンヌ・ダルクの描かれ方の変遷、およびその社会的背景をたどっている。しかし両者の研究には児童雑誌におけるジャンヌ伝は研究対象として含まれず、言及されなかった。また、明治時代に流通したジャンヌ・ダルク伝の多くは、ヨーロッパの作品の翻訳・翻案である場合や、日本でそれ以前に発表された作品の再話である場合があった⁸。しかしながら、先行研究ではこの点にはほとんど留意されなかった。したがって本稿では、ジャンヌ・ダルクの伝記をそれぞれの作品の原典または原テクストにも留意しつつ検討することで、先行研究を補完し、明治時代のジャンヌ・ダルクの表象をより詳細に把握することにも貢献しうると思われる。

第2節以降の本稿の構成は次の通りである。第2節では、児童雑誌に掲載される以前のジャンヌ・ダルクに関する伝記的な作品について、青少年の読者とその教育が意識されたと考えられるものを中心に整理する。明治時代中期以降の児童読者がジャンヌ・ダルクの伝記を享受するようになった素地はこの段階にできた。第3節から第6節では、上に挙げた五誌に掲載されたジャンヌ・ダルク伝について、それぞれの作品の原典または原テクストにも留意しつつ検討する。最後に第7節でまとめを付す。

2 児童雑誌・少年雑誌掲載以前のジャンヌ・ダルクの表象

筆者の調査では、1868（明治元）年から1912（明治45・大正元）年に日本で出版されたジャンヌ・ダルクの記事、単行本は現時点で判明しているだけで65種確認される⁹。このうち2019年3月までに判明した58種については表を別稿に掲載したので、参照されたい¹⁰。

本節で問題とする1890年代以前のジャンヌ・ダルク伝において、児童読者向けの伝記との関わりの中でとくに重要な特徴は以下の三点に集約される。第一に、第1節でも言及した、日本初のジャンヌ・ダルク伝である『西洋英傑伝』所収「二編上 仏郎国女傑如安之伝」が、一般読者とともに児童もその読者対象に含んだ点である。第二に、1870年代前半から発行された世界史の教科書の中でジャンヌ・ダルクの逸話が相次いで紹介された点である。第三に、1880年代半ば以降に、若年層の女性向けの教訓書や啓蒙的な婦人雑誌の中でジャンヌ・ダルクが紹介された点である。

まず、『西洋英傑伝』は、明治時代初期の世界史教育と国語教育に貢献した翻訳啓蒙書の一冊である。世界史教育では、1872年の「学制」頒布直後の官版万国史教科書が未編纂の時期に、教科書として使用された書物の一冊であった¹¹。国語教育では「文部省布達・第五八号」（1873年4月29日）において、小学校の教育現場で読まれる「読方之部」の「課業書」の一冊として指定された¹²。冒頭部に付された著者の作楽戸痴鶯による「例言」には、「経済の責ある諸君子ハイふもさらなり市街の君も児童の伽物語に読み聞せみはば

⁷ 高山一彦「明治日本におけるジャンヌ文献」『図録 ジャンヌ・ダルク展』、1982年、176-178頁。高山一彦『ジャンヌ・ダルク』、岩波新書、2005年。渡邊洋子「明治におけるジャンヌ・ダルク」、『独文学報』第14号、1998年、1-20頁。

⁸ 佐藤宗子によると、再話とは、何らかの原テクストを意識して新たなテクストを文字化する作業、およびその結果生み出されたテクストと定義される。外国文学作品については、原作を一般に紹介する翻訳・翻案を「第一次再話」、「第二次再話」を原テクストとして、その内容を切り取って生成されたものを「第二次再話」と呼ぶ。(佐藤宗子、『「家なき子」の旅』、平凡社、1987年、145頁、346頁。)

⁹ 注10の表の58種に加えて、以下の7種の文献が2021年4月までに確認された。作楽戸痴鶯他編『万国史略 中編下』、文部省、1874年；西村兼文『外国史略 卷三』、寿楽堂、1874年；可笑生「女傑若安達亜克の偉勲」、『少年文武』、2卷3号、1891年；内田不知庵「如安外伝」、『読売新聞』、1893年；岡本胡蝶「仏國の女將軍」『少女界』5卷2号、1906年；沼田笠峰「ジャンヌダスク」、『少女世界』第2卷7-8号、1907年；澤田撫松「將に亡びんとする仏蘭西を再建せしオルレアンの少女」、『婦人くらぶ』(紫明社)、4卷10号、1911年。

¹⁰拙稿「明治時代初期の児童向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの表象—『西洋英傑伝』を中心に」、『千葉大学教育学部研究紀要』、第67卷、2019年、412頁。

¹¹木全清博「万国史教科書の内容分析(1)」、『滋賀大学教育研究所紀要』第22号、1988年、35-42頁。

¹²府川源一郎『明治初等国語教科書と子ども読み物に関する研究』、ひつじ書房、2014年、19-20頁。

育英の階梯にも成るべく¹³」とあり、児童読者に「読聞せ」することも意識された。また、筆者は『西洋英傑伝』について別稿で論じたことがあり、その原典がマーガレット・フレイザー・タイトラー (Margaret Fraser Tytler, 生没年不詳) の児童向けの伝記集 *Tales of the Great and Brave*(1838) および、*Tales of the Great and Brave, Second Series* (1843) であることを明らかにした¹⁴。このように、原典が児童向けの読み物であった点、作者（翻訳者）の作楽戸痴鶯が児童読者を意識した点、実際に学校教育の現場において読まれた点から、この書物が児童向けのジャンヌ・ダルクの伝記の原点でもあったことが判明する。つまりジャンヌ・ダルクは日本で紹介された当初から、児童向け伝記の被伝者としての側面を持っていた。また実際に、この書物の読者は比較的多かったと思われ、たびたび再話の原テクストとして使用された¹⁵。

次に、『世界蒙求 前編』（1873年）、『各国英智史略』（1873年）、『世界智計談 中』（1874年）、文部省出版『万国史略 卷之二』（1874年）、西村茂樹編『校正万国史略 卷之六』（1875年）、『東西蒙求 卷之二』（1884年）といった世界史の教科書、文部省出版『仏国史略 卷之三』（1875年）、高橋二郎訳『法蘭西志』（1878年）、坪谷善四郎『仏蘭西史』（1890年）などのフランス史の教科書の中でジャンヌ・ダルクの挿話が見られる。特筆すべきは、これらの教科書の中に文部省出版の『万国史略』と『仏国史略』が含まれた点である。とくに『万国史略』は、文部省が師範学校と協力して初めて発行した小学校用歴史教科書の一冊であり、文部省が近代小学校の歴史教材の模範として提示したものであった¹⁶。明治初期の歴史の教科書にジャンヌ・ダルクが登場したのは、それらの編纂時に参照された欧米の歴史書に、その記述が存在したからだと思われる。明治時代初期から、ジャンヌ・ダルクが教科書に登場する模範的な歴史上の人物として、教科書編纂者、教育者、学習者の児童たちに認識されたのは、児童向け読み物の中でジャンヌ・ダルクの伝記が繰り返し掲載された理由の一つであると考えられる。

最後に、1880年代から女性向けの読み物の中でジャンヌ・ダルクが模範的な女性として紹介された。例えば巖本善治が山下石翁の筆名で発表した「女傑アークの伝」（『女学新誌』掲載、1884年）、『日本之女学』掲載「デヤンデアークの伝」（1889年）は啓蒙的な婦人雑誌での紹介の例である。また、西村茂樹編、宮内省出版の『婦女鑑』（1887年）をはじめ、『悲憤壯烈 才女列伝』（1891年）、『泰西婦女龜鑑』（1892年）といった女性向けの教訓書の中でも紹介された。先行研究でも「明治10年代から20年代にかけてのジャンヌ・ダルク像は女性の啓蒙を目的とし、『救国の英雄』という形で女性に社会参加のモデルを提供した」と指摘された¹⁷。実際に、たとえば、山下石翁（巖本善治）が執筆した「女傑アークの伝」は、『西洋英傑伝』のテクストに引用に近い形で大いに拠りながらも、ジャンヌが自らの運命を嘆く場面が削除され、また彼女が「国家」に尽くす様子を表す言葉が加えられて、女性読者の社会意識を鼓舞する再話者・巖本善治の強い意志が窺われる文章となっている¹⁸。

このように、児童雑誌、少年雑誌に掲載される以前に、ジャンヌ・ダルクが教科書や教訓書の中で相次いで紹介されたことで、彼女が児童の模範となる歴史上の人物として認識される素地が明治20年代までに出来上がっていたと考えられる。それでは、児童雑誌、少年雑誌の中でジャンヌ・ダルクはどのように描かれたのであろうか。

¹³ 作楽戸痴鶯、『西洋英傑伝』、英蘭堂、1872年補刻（京都大学人文学研究所所蔵）、初編上、2丁ウ。

¹⁴ 拙稿、前掲論文、420-418頁。

¹⁵ 同上、417-415頁。

¹⁶ 海後宗臣『歴史教育の歴史』、東京大学出版会、1969年、24-25頁。文部省が初めて出版した小学校用の歴史教科書は『史略』（1872年）、『日本略史』（1875年）、『万国史略』（1874年）の三部作であった。

¹⁷ 渡邊洋子、前掲論文、9頁。

¹⁸ 拙稿、前掲論文、416頁。

3 『穎才新誌』におけるジャンヌ・ダルクの伝記（1890年）

『穎才新誌』（1877年3月創刊）は、少年雑誌の嚆矢とされる『少年園』の創刊以前から続く、青少年向けの作文投稿雑誌の代表である。毎週土曜日発行の週刊誌で、毎週約一万部の発行部数があり、投稿作文の数も1882(明治15)年には一日約50通、一か月に1500通があったという¹⁹。向川幹雄によると、初期の頃の作文の投稿者は十代前半で小学高等科の生徒が中心的であり、その後、購読者層は中学生、青年へと年齢が上がったと推定される²⁰。この雑誌の明治20年代の読者の年齢層はいわゆる「子ども」よりも年上であったが、青少年向けの雑誌にジャンヌ・ダルクの伝記が掲載されたのはこれが最初であった。

『穎才新誌』に掲載されたジャンヌの伝記も読者からの投稿作文で、江連松花というペンネームの生徒が投稿した「女傑ジョアンダーク伝」である²¹。しかしながら、これは投稿者が独自に作成した作文ではない。この作文は、掲載号発行の数か月前に出版された教科書、坪谷善四郎著『仏蘭西史』（1890年）の一節「女傑ジョアンダークノ偉勲」を、部分的な省略や表現の微細な変更を加えながらも、ほぼそのまま書き写した文章なのである。このことは、冒頭部を坪谷の『仏蘭西史』の該当部分と比較すれば一目瞭然である。

ジョアンダーク女ハ、ミユズ河畔ノドンレミイト称スル、一村落旅居ノ少婢ニシテ、常ニ駅馬ヲ使役スルヲ以テ業トス、或ハ云フ、農業牧畜ヲ以テ父母ヲ養ヘリト、ジョアン幼ヨリ忠君愛国ノ教ヲ受ケ、長スルニ及シ、勤王ノ念益々深シ（江連松花「女傑ジョアンダーク伝」『穎才新誌』683号、1890年8月、2頁）

ジョアンダーク女ハ、ミユズ河畔ノドンレミイト称スル一村落旅店ノ少婢ニシテ、常ニ駅馬ヲ使役スルヲ以テ業トナセルモノナリ。或ハ云フ、農業牧畜ヲ以テ父母ヲ養ヘリト、ジョアン幼ニシテ忠君愛国ノ教ヲ受ケ、長スルニ及テ勤王ノ念益々深カシ（坪谷善四郎『仏蘭西史』、博文館、1890年3月、191頁。）

教科書からの抜粋に近い文章が雑誌に掲載されるのは、明治期のジャンヌ・ダルクについての文章に関しては、珍しいことではない。実際に、筆者が調査する中でも同様の事例が見られ、それについて論じたことがある²²。明治時代に流通したジャンヌ・ダルクに関する文章の場合、『穎才新誌』の例のようなほとんど同じ文章の掲載ではなくても、再話が多いため、冒頭部や固有名詞の表記を見ることで原テクストを推定できるものもある²³。

『穎才新誌』掲載の作文も、刊行されたばかりの『仏蘭西史』を模して投稿された。ところで、原テクストの『仏蘭西史』は、著者の坪谷善四郎によると「本書ノ事実ハテーロル氏ノ仏蘭西史、グードリツチ氏ノ仏蘭西史ニ依リ、傍ハラ諸書ヲ参考シ²⁴」て書かれた。この言葉にある「テーロル氏」と「グードリツチ氏」とは、明治期の日本の世界史教育のためにその著作の翻訳が使用された、アイルランドの歴史家ウィリアム・クック・ティラー（William Cooke Taylor, 1800-1849）とアメリカの作家サミュエル・グッドリッチ（Samuel Goodrich, 1793-1860）であると考えられる。両者はフランス史に関する著作も残しており、ティラーは『フランスとノルマンディーの歴史』（原題：History of France and Normandy, 1830）を、グッドリッチは『学校用絵入りフランス史』（原題：Pictorial History of France for school, 1847）を上梓したが、これらは増補版、改訂版も出版されるロングセラーであった。この二冊の中には、ジャンヌ・ダルクの挿話が数ページにわたり掲載されており²⁵、坪谷がジャンヌに関する

¹⁹ 竹内洋『立身出世主義[増補版]—近代日本のロマンと欲望』、世界思想社、2005年、16頁。

²⁰ 向川幹雄『日本近代児童文学史研究 I—明治の児童文学(上)』、兵庫教育大学向川研究室、1999年、51-54頁。

²¹ 江連松花「女傑ジョアンダーク伝」、『穎才新誌』、第683号、1890年8月、2-3頁。

²² 拙稿、前掲論文、417-415頁。

²³ たとえば本稿第3節の『少年文武』掲載のジャンヌ伝の例を参照。

²⁴ 坪谷善四郎「例言」、『仏蘭西史』、博文館、1890年3月、2頁。

²⁵ Samuel G. Goodrich, *Pictorial History of France for school*, Philadelphia, Sorin and Ball, 1847, p.144-148; W. C. Taylor, *History of France and Normandy*, Philadelphia, C. Desilver, 1859,

る記述を行う際に参考にしたと推定される。

坪谷善四郎（1862-1949）は、東京専門学校（現・早稲田大学）在学中の1888年に博文館に入社した。明治期の児童図書出版を牽引したこの出版社の初期の編集主幹・編集局長であり、『幼年雑誌』（1891年創刊）、『少年世界』（1895年創刊）、『中学世界』（1900年創刊）といった青少年向けの雑誌も複数創刊し、児童図書出版に貢献した。²⁶

坪谷が『仏蘭西史』で執筆した「女傑ジョアンダークノ偉勲」は分量としては4頁半、2000文字に満たない。ジャンヌ・ダルクの出自、当時のフランスの状況、ヴォークルールの守備隊長を介した王太子シャルルとの謁見、オルレアン解放戦と勝利、ランスでのシャルル七世の戴冠式、戴冠式举行後に帰郷を望んだジャンヌをシャルル七世が引き留めたこと、1430年春の敗戦と捕縛、シャルル七世の裏切り、1431年5月30日の火刑による死、という一連の出来事が簡潔な文体で記されている。

歴史的な事件が淡々と書かれる一方、坪谷の描くジャンヌ像には大きな特徴がある。それは彼女が幼い頃から「忠君愛國ノ教ヲ受ケ」、成長して「勤王ノ念益々深」くなったと書かれ、幼少期の描写に「忠君愛國」「勤王」という言葉が明記された点である。

たとえば、『西洋英傑伝』ではジャンヌの受けた教育と彼女の性質として、「神を崇み経文を誦するをのみハ教を受け成長に従ひ性質善良柔軟にして慈悲の心最と深かりけり²⁷」と述べられた。つまりジャンヌが貧しさゆえに学校教育を受けることができなかつたが、信仰心、善良さ、慈悲深さにおいて秀でた子どもとして成長したことが書かれた。

それに対して坪谷の描くジャンヌ・ダルクは、強い愛国心を持ち、「忠君愛國」精神の申し子であるかのように描かれる。ここでジャンヌは、イギリスが「仏国ヲ凌辱」したことについて「悲憤慷慨」し、古の賢者が予言した「国家ノ大災ヲ掃除ス」るために出現する「神嬢」とは「我ニアラザルカ」と自ら考えて、「奮然救国ノ大義ヲ唱へ」てシャルルに謁見し戦場へ向かうとされた²⁸。つまり、神の声や周囲の人間の苦しみが戦場へと向かう契機となつたのではなく、自分の中の「忠君愛國」の精神に突き動かされ、王太子への謁見を願い出たと書かれたのである。このような書かれ方がなされた理由としては、坪谷が、学校教育で取られた歴史教育の方針を意識した可能性が考えられる。

日本の学校教育制度では、1872（明治5）年の学制において上等小学の科目として歴史教育が規定された²⁹。明治10年代前半までの小学校での歴史教育には、日本史と外国史の両方が含まれ、第2節で言及した、文部省刊行の『万国史略』をはじめ、欧米の歴史書が参照されつつ、複数の外国史の教科書が編纂された。変化の契機は、1879（明治12）年の教学聖旨、1881（明治14）年の小学校教則綱領策定の際に内々に伝えられた聖旨であった³⁰。前者は、明治維新以来の教育が、欧米の学芸を摂取することに傾く傾向があるので、改めて仁義忠孝を基にした教育が学校において行われるようにという内容であった³¹。後者に関しては明治天皇自らが歴史の綱領における次の三点の修正を求められた。第一に、乱、役などの戦争を主筋として歴史を教えることへの批判、第二に戦争ではなく王政が栄えた時期も取り上げるべきだと指摘された点、第三に建国の体制、つまり、神代に関する教材を教科書の最初に入れるよう指示された点であった³²。この聖旨に、歴史教育は尊王愛國の士気を養成するという目標に沿うべきだという考えがあったのは明らかであり、小学校教則綱領以降の小学校の歴史教育では日本史のみが教授されることとなつた³³。

『仏蘭西史』は外国史の教科書であり、ジャンヌ・ダルクもフランスの歴史上の人物であ

p.181-186.（後者は増補版。）

²⁶ 日本児童文学学会編、前掲書、487頁。

²⁷ 作楽戸痴鶯、前掲『西洋英傑伝』、二編上、2丁才。

²⁸ 坪谷善四郎、前掲『仏蘭西史』、191頁。

²⁹ 「歴史教科書総解説」、海後宗臣編『日本教科書大系 近代編第20巻歴史（三）』、講談社、1962年、527-528頁。

³⁰ 同上、551-554頁。

³¹ 同上、551頁。

³² 同上、554頁。

³³ 同上、555頁

るが、学校での歴史教育に沿うものとしてそのエピソードが捉えられた可能性がある。「忠君愛国」「勤王」の精神の申し子のようなジャンヌ・ダルクの描写には、読者である青少年の士気を鼓舞する意図があったと言え、実際に読者がこのように描かれたジャンヌ・ダルクに共感したということもありえたであろう。『仏蘭西史』の文章をほとんどそのまま『頴才新誌』に投稿した江連松花という生徒もまた、そうした青少年読者の一人であったと考えることもできる。ジャンヌ・ダルクと「忠君愛国」という主題は、児童雑誌、少年雑誌に掲載され始めた当初から深く結びついていたことが分かる。

4 『少年文武』におけるジャンヌ・ダルクの伝記（1891年）

『少年文武』は『少年園』において科学記事を担当した中川霞城が主催した月刊誌で、『少年園』創刊から約一年後の1890年1月に張弛館より創刊された。「文武」の言葉が示す通り、文武両道の教育路線が強調され、創刊号では「文学、武芸、理科、美術の四柱を以て一堂を建築し、其中に忠孝節義の神靈あり、是れ實に少年文武の本体なり」と宣言した³⁴。ジャンヌ・ダルク伝が掲載されたのは第2巻第3号の「少年筆華」という読者投稿欄で、可笑生という投稿者による「女傑若安達亜克の偉勲」である³⁵。

結論から述べると、江連松花「女傑ジョアンダーク伝」と同様に、この投稿作文も独自の文章ではない。『婦女鑑』所収の「若安達亜克」の文章と坪谷善四郎『仏蘭西史』の「女傑ジョアンダークノ偉勲」の文章に拠り、両者を組み合わせ、かなり短くしたものである。この点は投稿文の題名「女傑若安達亜克の偉勲」が、二つの原テクストの題名を組み合わせていることからも察しがつく。しかし、冒頭部を比較するとより明確になる。

若安達亜克は。一千四百十年に法国の屯列米といへる僻地の村落に生る。父母はいと貧しき農家ならば。其女を教育するの資力あらねど。正直にして神を信ずること篤かりければ。[……]生長するに従ひて。敬神慈愛の心深く。（「若安達亜克」『婦女鑑 四』、宮内省、1887年、43丁ウ。句点原文ママ）

ジーアンダークは、紀元一千四百十年仏国ミュズ河畔の一小村、ドンレミイに生る。ジョアン幼くして忠君愛国の教を受け、其の長ずるに及んで、勤王の念、益々深く、敬神慈愛の心、愈々厚し。（可笑生「女傑若安達亜克の偉勲」『少年文武』、第2巻3号、1891年3月、70頁。）

『婦女鑑』では、ジャンヌは貧しく学校へは通えなかつたが、信仰心と慈悲深さに秀でた子どもとして書かれており、この点で、『婦女鑑』の「若安達亜克」の冒頭部の記述は、先述した『西洋英傑伝』におけるジャンヌの子ども時代の描写とよく似ている。

『少年文武』の文章では、第3節で引用した『仏蘭西史』にある「忠君愛国ノ教」や「勤王ノ念」という言葉が使われつつ、『婦女鑑』の「敬神慈愛の心」という表現も使われ、ジャンヌ・ダルクは幼少期から強い愛国心ばかりでなく、信仰心、慈悲深さもすべて兼ね備えた女性として表されている。また、年代についても『婦女鑑』に拠っている。

可笑生の文章はわずか800文字あまりの短いものである。百年戦争の背景、ジャンヌが王の元まで行くいきさつ、オルレアンでの勝利、シャルル七世の戴冠式、コンピエニユの戦いでの敗北、火刑といった歴史上の出来事も大変簡単に書かれた。しかし、戦いの場面では短いながらも躍动感のある文となっており、その部分は『仏蘭西史』の方に多くを拠っている。とくに「ジョアン即ち『ナイト』の鎧を纏ひ、剣を提げ、白馬に跨て、兵卒を指揮し、猛虎の勢を以て、敵軍に当り、城門を開て突進し、英の食糧を奪ひ、以て城中に送る、是に於て、城兵勇気頓に増し、益々敵軍を攻す」という一文は、『仏蘭西史』の文章を短縮し、また「『ナイト』の鎧」といった原テクストにない表現も使って、ジャンヌが勇猛果敢に戦う様子を生き生きと描き、山場となる印象的な場面を出現させた。

³⁴ 日本児童文学学会編、前掲書、390-391頁。上田信道「『少年文武』創刊号から見た中川霞城の業績」『翻訳と歴史－文学、社会、書誌』第6号、2001年5月、4頁。

³⁵ 可笑生「女傑若安達亜克の偉勲」『少年文武』、第2巻第3号、1891年3月、70-71頁。

本節冒頭でも述べた通り、『少年文武』は文武両道の教育路線が強調された雑誌であった。ジャンヌ・ダルクに関する可笑生の投稿作文は、「忠君愛国の教」や「敬神慈愛の心」といった模範とすべき美德を説くと同時に、実際の戦いの場面が生き生きと描かれていた点も評価され、掲載されたのかもしれない。

5 『少年園』及び『少国民』におけるジャンヌ・ダルクの伝記（1892年、1897年）

『少年園』は1888年11月に創刊され、月に二回発行された。明治期の本格的な少年雑誌の先駆であるとされる。「少年園」（巻頭論文）、「学園」（自然科学などの知識）、「文園」（文芸作品紹介）、「叢園」（季節の話題）、「芳園」（読者投稿）、そして「譚園」（伝記などの読み物）という紙面構成の³⁶、少年向け総合雑誌である。当時の児童向けの逐次刊行物において投稿雑誌が中心的な位置を占めた中で、論文、学習的な記事、そして少年向けの物語や伝記の掲載に注力した点で画期的であり、「少年雑誌界のエポック・メイキングになった³⁷」と評価される。

1892年7月から8月に「ジョアン、ダークノ伝」が掲載されたのは、少年向けの読み物が好評を博した「譚園」の欄であった³⁸。冒頭では「仏蘭西国のジョアンダークと云へる婦人は歴史上もっとも有名なる一少女なり。今歴史家ヒューム氏の筆になれる此少女の伝を茲に抄録せん」と述べられ³⁹、出典について説明された。原典である「歴史家ヒューム氏」の著作とは、デヴィッド・ヒューム（David Hume, 1711-1776）の『イングランド史』（*The History of England, 1754-1762*）、第20章「ヘンリー6世」（"Henry the Sixth"）の中に収録された「オルレアンの乙女」（"The Maid of Orleans"）の挿話である。筆者が参照した原典の版では⁴⁰、約14頁にわたる挿話であり、『少年園』でも第89号（1892年7月）と第91号（同年8月）の二号に連載された。児童雑誌、少年雑誌に掲載された中では、初めての長編のジャンヌ・ダルク伝であると言える。また、管見の限りではヒュームの『イングランド史』を原典とするのは、『少年園』掲載の「ジョアン、ダークノ伝」が最初である。従来のジャンヌ伝の再話ではなく、新たな原典の作品の翻訳がなされた点で、新鮮味のある新しい伝記が発表されたと言える。なお、『少国民』第9巻25号（1897年12月）に掲載された岳仙叟「如安達克」は『少年園』掲載の「ジョアン、ダークノ伝」とほぼ同じ文章であるため⁴¹、ここでは『少年園』の「ジョアン、ダークノ伝」に拠って述べていきたい。

まず、冒頭で「此少女の伝を茲に抄録せん」と述べられたように、翻訳の仕方は抄訳であり、訳出される部分と、訳出されない部分とが比較的はっきりと分かれている。訳出されなかった部分は、細かな挿話や、英仏の情勢などの歴史的背景の詳細が多い。歴史記述に対するヒュームの考えが述べられた部分も訳出されなかつたが、それは物語の進行を止めるからであろう。訳出された部分は、内容の面では原文に改変を加えず翻訳される傾向にある。したがって、ヒュームの記述の特徴が引き継がれた作品であると言える。

この翻訳の特徴は三つ挙げられる。第一に、ジャンヌが精神的にも強く、武術にも長けた女性として提示される点である。これまで見てきたように、信心深さ、慈悲深さ、「忠君愛国」の申し子など、ジャンヌ・ダルクの美德は様々に提示されるが、『少年園』掲載の伝記では、ジャンヌは「言語動作一として間然すべき所」のない「非常の大器量ある」優れた女性であり、戦場に行く前から「肝勇抜群」で「女性の常なる怯弱優柔の質を除却」

³⁶ 日本児童文学学会編、前掲書、381頁。

³⁷ 続橋達雄、前掲書、11頁。

³⁸ 無署名、「ジョアン、ダークノ伝」『少年園』第89号、1892年7月、18-21頁；同左、第91号、1892年8月、14-17頁。

³⁹ 無署名、「ジョアン、ダークノ伝」『少年園』第89号、1892年7月、18頁。

⁴⁰ David Hume, *History of England, Volume II*, based on Edition of 1778, with Author's Last Corrections and Improvements, Indianapolis, Liberty Classics, 1983, p.397-410.

⁴¹ 岳仙叟「如安達克」『少国民』第9巻25号、1897年12月、5-17頁。ただし、冒頭の紹介文や漢字の送り仮名の表記等には微細な相違がある。

し、馬を「乗り回すの達者なる」雄々しい女性として書かれた⁴²。第二に、ジャンヌが神の声を聴き、「天命」を受けて国を救おうとしたのは彼女の「想像」であると述べられた⁴³。訳出はされなかつたが、ヒュームはこのジャンヌの「天命」のエピソードを書く前に「『奇蹟』と『驚異』とを区別すること、ただの世俗的かつ人間的なあらゆる叙述の中で前者を拒絶し、後者を疑うことが歴史の本分である。⁴⁴」と述べた。したがつて、オルレアンでの勝利等の出来事も克明に述べられるが、そこに奇蹟的な力は介在しない。ジャンヌ・ダルクが信仰心に篤い女性としてではなく、強く秀でた女性として描かれたのも、この点と関係が深いと思われる。第三に、本稿で取り上げた児童雑誌、少年雑誌に掲載のジャンヌ・ダルク伝と比較して、ランスでのシャルル七世の戴冠式以降、ジャンヌが敗北し、捕縛され、裁判にかけられて死刑へと至るまでの顛末が詳細に、多くの分量を取つて描かれた。ジャンヌがイギリス軍との戦いに負け、死に至るまでのエピソードは、短縮され、簡単に書かれことが多い。しかし、『少年園』では第89号の記事で戴冠式まで、第91号の記事で彼女が死へ向かうエピソードが書かれ、十分な量が割かれていると言える。とくに、ジャンヌが宗教裁判にかけられるまでのいきさつ、裁判における裁判官とのやりとりは他の文献と比較しても詳細に書かれている。

『少年園』で掲載されたジャンヌ・ダルク伝は、ジャンヌ・ダルクの一生の出来事が、その栄光と転落の両方がバランスよく書かれた長編の伝記であり、読者が歴史を学習する際にも役立つと考えられる。奇蹟を「想像」として排したヒュームの記述は合理的であり、翻訳もその特徴を引き継いでいる。児童向けの伝記としては、『頴才新誌』や『少年文武』に掲載された文章よりも、分量の面でも、歴史的記述の面でも充実している。『少年園』という少年向けの読み物が充実した画期的な雑誌で発表され、多くの少年読者の目に触れた、初めての本格的な児童向けの伝記と言うことができるだろう。

6 『少年世界』におけるジャンヌ・ダルクの伝記（1898年）

『少年世界』は博文館が「中小学々齢諸君」を読者対象として1895年に創刊され、主筆の巖谷小波の「お伽噺」をはじめ、多数の文壇人を擁した執筆陣による文学的読み物が人気を博し、明治期を代表する少年雑誌となつた⁴⁵。『少年世界』に掲載された「ジャンヌ、ダルク」は、作者の高山樗牛が独自に執筆した文章である⁴⁶。ただし日本で公刊されたそれまでのジャンヌ伝が、歴史的事実を確認する資料として参照されたことは推測される。

この作品は、『少年世界』第4巻第1号（1898年1月）から第4巻27号（1898年12月）までの一年間連載された「東西二十四傑」シリーズの記事であった。「東西二十四傑」は、日本と外国の英雄の伝記の連載であり、各記事は平均的に約10頁の分量で書かれ、当時の『少年世界』の目玉の一つであった。たとえば博文館の雑誌『太陽』第2巻第25号（1896年12月）には、「博文館発行四大雑誌改良広告」の一つとして「明治三十年の『少年世界』」という広告がある。そこではこれから『少年世界』が「従前の体裁を一変し、泰西雑誌の編集法に則り、益々材料を精選し、有益にして、趣味多き記事のみを執り、江湖少年諸君が日夕ご娯楽の間、彌々益々智徳を啓發するの資に供せんとす」と宣言され、具体的に「英雄談 能く東西英雄の面目を描き出し、読む人をして眼前之を見するの思あらしむ」というように「英雄談」が重要な読み物のジャンルとして挙げられた⁴⁷。ジャンヌ・ダルクは「東西二十四傑」シリーズの最後を飾る24人目の英雄であると同時に、紹介された24名の人物の中で唯一の女性の被伝者である。

「英雄談」に力を入れるという広告の文言に違わず、「ジャンヌ、ダルク」は児童読者に

⁴² 無署名、「ジョアン、ダークノ伝」『少年園』第89号、1892年7月、19頁。

⁴³ 同上、19頁。

⁴⁴ (原文: It is the business of history to distinguish between the *miraculous* and the *marvelous*; to reject the first in all narrations merely profane and human; to doubt the second;) David Hume, *op.cit.*, p.398.

⁴⁵ 日本児童文学学会編、前掲書、387-388頁。

⁴⁶ 高山林次郎「ジャンヌ、ダルク」『少年世界』、第4巻27号、1898年、60-66頁。

⁴⁷ 「博文館発行四大雑誌改良広告」『太陽』第2巻第25号、1896年12月、(四)頁。

とって分かりやすく、かつ生き生きとした作品となっている。まず、7頁の文章において「一、はしがき」「二、おひたち」「三、オルレアン城の救助」、「四、最後」と起承転結が明確に分けられている。また、「さらばジャンヌ、ダルクは如何なる人ぞ⁴⁸」というような読者への問い合わせもなされ、読者が読み進めていきやすいよう工夫が施されている。

ジャンヌ・ダルクの描かれ方に関しては、彼女が特別なところのない普通の子どもであった点、彼女が若い女性であった点が強調され、彼女の功績とのギャップが頻繁に書かれた。たとえば、「ジャンヌ、ダルクは貴族にもあらず、武士にもあらず、又男子にもあらず、教育もなく門閥もなく、彼が其大事に当るまでは、仏蘭西中に其家族隣人の外は何人も其名をだに知らざりし一女子にして、其年さへも僅に十八の妙齡なりき」と紹介され、幼少期には「何事もなく田舎の一少女として暮し」たとされた⁴⁹。「一女子」「一少女」「一小女子」といったジャンヌを示す言葉はこの文章で10回以上使用されている。一方で、ジャンヌが成した功績については「回天の偉業」、「非凡の威力」、「めざましき勝利」、「驚くべき勝利」、「奇蹟」と書かれ、戦場でのジャンヌの様子は次のように描かれた。

彼れ戦に臨むや常に全軍に先ち、矢石乱飛の間を馳騁し、叱咤督励到らざる所なし。彼に従へる前列の兵士、敵丸に中りて数十百人立地に仆るゝが中に、奇しき哉ジャンヌは身丸一矢を受けず、悠然として干戈の間を周旋する様は真に人業ならず見えにけり（高山林次郎「ジャンヌ、ダルク」『少年世界』第4卷第27号、1898年、64頁。）

このようなジャンヌの「矢石乱飛の間を馳騁」するような勇敢さ、「人業ならず」と書かれるような様子と、彼女がただの「一少女」であることとのギャップは、歴史的な出来事の記述の中に織り交ぜられて表現され、読者はジャンヌの周囲で起こる出来事の不思議さに強く惹かれたのではないかと推測される。また、彼女が13歳の頃に天使の声を聴いたという出来事が書かれたのは、児童雑誌の中では『少年世界』掲載の「ジャンヌ、ダルク」が最初である。それまで児童雑誌、少年雑誌の中で愛国心の発露や「想像」として書かれてきたこの出来事が、「奇しくも又驚くべき」奇蹟として書かれたことで⁵⁰、物語の不思議さは増し、ジャンヌの伝記が読み物として面白くなつたと言うことはできるだろう。

「ジャンヌ、ダルク」の作者、高山樗牛が、明治30年代前半に『太陽』の主筆として華々しい言論活動を展開した思想家であることは周知のとおりである。彼がこの児童向けの伝記を執筆したのは、1897年5月に博文館に招聘されて『太陽』の主筆となり、「日本主義」を標榜しながら諸論文を次々に発表したのと⁵¹、まさに同時期のことであった。彼は『少年世界』に寄稿した論説「少年の読書の法如何」（1898年）で次のように述べた。

少年の志を風発し、自然に奮励せしむるものは、偉人傑士の伝記に若くは無し。由來少年の特性及び美質は模倣嘆美の精神に富めるにあり。今夫れ伝記は忠孝、節義、勤学、苦行、功名の譚話を史上の事実として吾人に語るもの、其中おのづから吾人をして感奮興起せしむるものある也。[……]吾少年諸子の中、雑念無志心鏡を曇らし、情欲空想雲の如く湧く時は、去て英傑の史伝を繙け、必ずや翻然として自ら悟り、報然として自ら愧ぢむ。是の如くにして一氣勇猛の精神を鼓舞し、鞭撻一番、古人を仰て以て精進せば、何物の行路難か能く吾人の前程を沮遏し得べき。（高山林次郎「少年の読書の法如何」『少年世界』、第4卷1号、1898年、18頁。）

このように、伝記は、被伝者を児童読者が模範とし「忠孝、節義、勤学、苦行、功名」という美德を学ぶためのものであるとして高山樗牛は捉えている。同時に、それが少年読者の「志を風発し、自然に奮励」して、「勇猛の精神を鼓舞」するものであると考えられていた。また、高山樗牛は同時期の『少年世界』に寄稿した別の論説「愛国心」（1898年）において、

⁴⁸ 高山林次郎「ジャンヌ、ダルク」『少年世界』第4卷第27号、1898年、60頁。

⁴⁹ 同上、60頁。

⁵⁰ 同上、60-61頁。

⁵¹ 「高山樗牛」、昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第6卷、1957年、280-282頁。

少年読者が「眞誠に国家を愛護するの精神」を持ち国を発展させるべきこと、国家の有事に際しては「国家の為に、身を犠牲に供し、皇室の為め、又後世子孫の為に一命を擲つは帝国臣民が絶大の名誉とすべき所なり」と強い筆調で読者に説いている⁵²。

高山樗牛が「東西二十四傑」シリーズに寄稿したのは「ジャンヌ、ダルク」一編のみである。さらにこの伝記は、シリーズの最後を締めくくる重要な位置にあった。なぜ被伝者として、ジャンヌ・ダルクが選ばれたのであろうか。高山樗牛の「ジャンヌ、ダルク」には、たとえば坪内善四郎が『仏蘭西史』の中で使用した「忠君愛国」「勤王」といった直接的な言葉は一度も出てこない。しかしながら、高山がジャンヌ・ダルクの伝記と同時期に執筆した論説も併せ読むと、この伝記の中に「一女子」であるジャンヌ・ダルクさえも勇猛果敢に戦い、国を守る奇蹟を起こしたのであるから、少年読者もまた國の為に力を尽くし戦わなければならぬ、という作者の考えが込められたとも思えるのである。また、起承転結を明確にした構成、読者への問い合わせ、ジャンヌの起こした奇蹟の強調といった特徴を持つ不思議で魅力的な物語は、読者を楽しませると同時に、国を愛し戦う意志を、少年読者の中に自然と引き起こすように工夫され書かれたのではないか。この意味で、『少年世界』の「ジャンヌ、ダルク」では従来のジャンヌ伝よりも巧妙に「忠君愛国」の美德が説かれているのであり、児童雑誌、少年雑誌の中でジャンヌ・ダルク伝は、やはりこの主題と分かちがたく結びついていることが判明するのである。

7 まとめ

本稿では、明治時代中期の児童雑誌、少年雑誌におけるジャンヌ・ダルクの伝記について、それぞれの特徴を検討した。その結果、全体としては次の三点の特徴が判明した。

まず、文章そのもの特徴として、当初は投稿作文であり分量も少なかったが、『少年園』、『少年世界』という少年向けの読み物を重視した教育的、娯楽的要素の強い雑誌において、歴史書に基づく翻訳や、文筆家の創作による作品が発表され、分量の面でも少年向けの読み物として充実していった。

第二に、内容の面では、当初は教科書、教訓書の文章の引用・抜粋から始まり、分量も短いため、個々の出来事は簡潔に記され、物語としての面白みにも欠けていた。しかし、『少年園』では、抄訳ではあるが、ヒューム『イングランド史』の該当部分を比較的忠実に翻訳したため、ジャンヌ・ダルクが王太子に謁見し、オルレアンを解放してシャルル七世を戴冠式へと導くまで、そして、その後の戦いに敗北し、宗教裁判に掛けられ火刑に処されるまでの出来事について、経緯や背景も含め詳細な記述が見られた。さらに高山樗牛の「ジャンヌ、ダルク」では、起承転結が明確になるように物語が再構成され、読者への問い合わせ、ジャンヌが「一少女」であることと、彼女の成し遂げた「回天の偉業」との対比が書かれたことで、読みやすさ、読者を惹きつける面白さも増した。

第三に、ジャンヌ・ダルクの美德として、信仰深さ、慈悲が書かれる場合もあったが、「忠君愛国」の精神と、彼女の強さ、勇姿の方が頻繁に描かれた。その背景には、教科書の著者の意識、翻訳の原典の性質など個々に理由はあると考えられる。しかしながら、全体として、男児の読者の割合の方が多い初期の児童雑誌、少年雑誌においては、読者の男児を鼓舞するという目的があり、ジャンヌ・ダルクもその目的の中で語られ、強く勇敢な女性として語られたと言えるのではないだろうか。また、坪内善四郎が描いた「忠君愛国」の申し子としてのジャンヌの姿は、明示的に語られることはなくても、ジャンヌ・ダルク伝と分かちがたい主題であり続け、ジャンヌ・ダルク伝を読む少年読者たちは、ジャンヌのような愛国心を持つことを、つねに期待されたのではないだろうか。

1901年には、児童向けジャンヌ・ダルク伝の初めての単行本である中内蝶二『惹安達克』が博文館から上梓され、明治30年代半ば以降には少女雑誌においてもジャンヌ・ダルクの伝記が掲載されていく。その様相についてはまた別稿にて検討したい。

⁵² 高山林次郎「愛国心」『少年世界』、第4巻3号、1898年、17-19頁。